

第1回グローバル地域文化学会大会

I. グローバル地域文化学を構想する

高木 繁光

「グローバル地域文化学を構想する」という題目を与えられておりますが、これは前学部長の松本賢一先生が付けられ、代理の私がそれを引き継いだものです。松本先生はどのようなグローバル地域文化学を構想されていたのか、今年の父母会の挨拶ではこう話されておりました。「グローバル化という視点から多様な地域と文化を学ぶ私たちの学部は、しかし、けっして『グローバル化に乗り遅れるな』というものではありません。グローバル化する世界の中でグローバル化に取り残される、あるいはグローバル化に反対する地域が必ず出てくる。ここは、そのようなグローバル化からはずれた地域をも含めて、グローバル化する世界について考えていく学部です」と。

日本はつねに外の世界から影響を受けてきました。先日、大徳寺に行ったのですが、大徳寺の真珠庵には狩野元信の障子絵が残されています。狩野元信は洛中洛外図で知られる狩野永徳の祖父にあたります。狩野派の初代、狩野正信はもともと関東の人ですが、漢画（中国の宋元時代の風景画）を得意としていました。京都に来た正信は、雪舟の推薦で銀閣寺の障子絵を描いたと言われています。この正信の子である元信が描いた真珠庵の障子絵には、中国の西湖の幻想的な風景が緻密なタッチで描かれています。元信は、雪舟のように中国に絵画留学をしたことはありませんが、中国の風景画を実に見

事に描いている。この元信は、京都で大和絵の大家、土佐光信の娘と結婚する。自身も大和絵の画家である光信の娘と結婚し、彼女から大和絵の技法を学ぶことで、元信は漢画と大和絵を融合した作風を生み出し、それが孫の永徳に受け継がれていきます。

京都国立博物館では先週まで清朝陶磁展が開催されていました。これを見ると鎖国の江戸時代においてさえ、明、清時代の陶磁器がいかに多く日本に輸入され、愛好されていたかだけでなく、有田や鍋島の陶器職人が、清の技法を熱心に学び、実に見事なイミテーションを作り上げ、さらにアレンジを加え洗練したものに仕上げた努力のあとを知ることができます。

つまり、日本文化は中国あるいは朝鮮の影響を受け、これを模倣し、コピーすることで形成されてきた。江戸から明治にかけて、画家や陶芸家のみならず、多くの知識人も、「あたかも中国人であるかのように」、中国的なものに同化することを通して日本的なものを生み出してきました。ニーチェは、仮面こそが本当の自分なのだ、仮面をつけ他者を演じることで私たちは本当の自分を見つけるのだと考えましたが、日本人は「中国」という仮面をつけ、その仮面の力によって自分自身を変え日本人になったと言えるかもしれません。私たちのあり方自体を変えてゆく、そういう仮面の力がある。近世においてだけでなく、明治以降も私たちは西洋という仮面をつけることで、今ある日本文化を作ってきました。

では、今日のグローバリゼーションという仮面は、私たちをどう変えてゆくののでしょうか？例えば韓国や中国ではおそらく日本よりもっとグローバル化が進んでいる。韓国では、「グローバル化に乗り遅れるな」という意識が日本よりずっと強いのではないかと思います。経済的な面だけではなく、社会的な価値観や実生活のレベルでもグローバル化が、日本よりも急速に進んでいる。台湾にしろ、中国にしろ、そうなのではないか。そして、グローバル化に乗り遅れまいとする一方で、その反作用として、自国の歴史や伝統を守ろうという意識も日本以上に強く働いているようです。

その是非はともかく、日本の場合、「グローバル化に乗り遅れるな」という意識はそれほど強くない気がする。一時的にはグローバル化が熱く説かれるものの、「グローバル化だ」、「いやグローバル化はいらない」という意見

が並行しながら、やがて自然に外的な要因でそうなったかのように、ゆるやかなかたちでグローバル化が進行していく。日本においては、まるで何もなかったかのように、まるでそれが自然のなりゆきであるかのように、歴史が進んでいく。意識して歴史を変える、歴史の進行を意識して担うことよりも、私たちは、むしろ、まるで何もおこらなかったかのような仮面を好む傾向がある。

このことは、私たちが過去を忘れやすいことと関わっています。寺田寅彦が言うには、日本人は絶えず歴史の中で津波とか地震とか災害に見舞われてきたにもかかわらず、すぐにそれを忘れてしまう。この日本人の忘れっぽさは、寺田によれば、もしかしたら『方丈記』のような無常観が染みついているせいかもしれない。あるいは、資本主義の世知辛い世の中は、いつ来るかわからない地震のために土地を利用しないことを許さないから、あえて忘れるのかもしれない。

藤田省三という思想家によれば、日本社会は技術的近代化が速すぎ、国民的実感はそれに適応してゆくのには忙しいため、生活の場が、歴史的連続性からはずれた点として感じられてしまう。その結果、過去は非脈絡的な思い出としてご都合主義的に現在と結びつけられ、線の歴史は消え去ってしまう。つまり、線的にではなくて、循環的にある状況が反復され、状況主義的に何が起り、また忘れられる、そういう歴史感覚が近代以降の日本にあるのではないか。

このような歴史感覚において進行するグローバル化はもしかしたら、主体に変容をもたらすニーチェ的仮面というよりも、その下に前近代的なものがほとんど意識化されないままとどまっている能面のようなものかもしれません。どうしたらそれをニーチェ的な仮面に転換できるのか？グローバル化を契機として、日本人はどのような仮面に導かれて、新しい主体への変容をなしとげるのか？このような問いから出発して、グローバル地域文化学は構想されねばならないと思います。



Ⅱ．学術講演会報告

2013年12月11日（水）午後3時より、グローバル地域文化学会は志高館にて本学会大会を行いました。大会の一環として大阪大学大学院文学研究科教授の桃木至朗氏をお招きし、「世界史教育と地域史教育」との演題で第1回学術講演会を開催しました。桃木氏は、研究上の後継者育成しか頭にないような従来の大学教育を「右肩上がりの時代の発想」と鋭く批判するとともに、グローバル人材育成を謳う国際系・外国語系学部が多くが抱えている課題を指摘しながら、その解決に寄与しうる（将来の）市民のための世界史教育の構想を語りました。桃木氏の講演に対して本学教員の小川原宏幸、向正樹両氏によるコメントがなされ、その後、本学教員や学生だけでなく、高校教員や高校生、会社員といった幅広い参加者との間で活発な議論が交わされました。

以下、桃木氏による講演内容の概要および小川原氏のコメント、桃木講演へのフロアからの反応についての向氏の分析を掲載します。

<桃木至朗氏プロフィール>

神奈川県出身。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科中退。1986～88年にハノイ総合大学ベトナム語科(当時)に留学。京都大学東南アジア研究センター助手、大阪外国語大学ベトナム語科専任講師、大阪大学教養部、文学部助教授をへて2001年から大阪大学大学院文学研究科・文学部教授。狭義の専門は、中世～近世ベトナム史を中心とする東南アジア史だが、1990年代以降、日本史とアジア史をつなぐ「海域アジア史」へと研究領域を拡大し、現在では特に、歴史学の評論・解説と世界史教育に尽力し、2005年から大阪大学歴史教育研究会代表を務めている。

◆講演 世界史教育と地域史教育

桃 木 至 朗

はじめに

講演に先立ち、教育の基本精神について述べておきます。私は、教育＝サービス業という認識にはくみませんが、サプライ・サイドの都合を押しつける教育ではダメだと考えています。古いインテリ社会や教養を前提として、「教師の背中を見て自分で工夫して自主的に勉強しろ」と要求するような指導法が通用するのはごく一部の学生に過ぎません。そして研究上の「後継者養成」を軸とし、「その他は雑用」とするような教育姿勢は、その学問の社会的必要性を論証しなくてよかった右肩上がりの時代の発想です。高校教育や大学教養教育と専門研究とは大きな連続部分があり、その部分をトレーニングすることは、教員養成、市民的教養、研究者養成のすべてにつながっていきます。

今日は、そのような理念にもとづいて、私が、勤務先である大阪大学において携わってきた世界史教育のさまざまな取り組みをその事例として紹介し、その取り組みが目指す「市民のための世界史」とはいったい何かについてお話します。その上で、同志社大学グローバル地域学部とかかわって、グローバルな歴史と地域の個性的歴史をどうつなげるかという課題についての私の考えを述べることといたします。

1. 阪大史学の挑戦

世界トップレベルの研究

最初に歴史分野の専門研究についてですが、大阪大学は次のような分野でトップレベルの研究を進めています。まず、中央ユーラシア古代史、海域アジア史、近現代グローバル経済史といった、国単位の歴史の寄せ集めを超えた広域の世界史の分野です。その一方で、関西の視点を強調する日本史・考古学、農村のフィールドワークを伝統とする中国史・東南アジア史など、地

域に根を下ろしたミクロの歴史の分野でも存在感を示してきました。それだけではなく、分野横断的な試みも盛んです。たとえば、海域アジア史、近現代ヨーロッパ史などにおいては世界と日本との関わりを重視していますし、各分野で日常的な討論・他流試合を行うなかで、東洋史・西洋史では（最近では日本史の一部もですが）、世界の学界への直接発信に努めてきました。くわえて近年では、研究に必要な外国語の習得、留学や現地調査を大学院生が行うことはもとより、博士後期課程以上になると、当然のように国際学会で発表するようになっていきます。

「高大連携」による歴史教育の刷新

こうした大学内での研究活動だけでなく、大阪大学の歴史学専攻では、全国の高校教員と連携して、2003年から高校歴史教育の内容の刷新に取り組んできました。その出発点となったのは、2002-06年度21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」ですが、その過程で2005年に大阪大学歴史教育研究会（<http://www.geocities.jp/rekikyo/>）を設立し、阪大で月例研究会を行うほか、大阪・京都・神奈川・北海道・熊本など各地の教員組織の研究会活動に恒常的に協力・参加しています。こうした活動は、2012年4月にソウルで開催された第2回アジア世界史学会（AAWH）大会において歴史教育に関する3つのパネルを開催するなど、東アジア中心の国際交流にも関与していく契機となっています。2013年度は、横浜市で開催された全国歴史教育研究協議会（全歴研）や、堺市博物館が主催した中高生の歴史研究発表セミナー「世界と日本が会おうまち・堺2013」、東方学会の「東アジア史教育シンポ」、大阪府高齢者大学の「世界史から学ぶ」コースなどへの共催・協力といった活動を行いました。

現在は、高等学校における歴史教育改善に向けた活動だけでなく、大学教養教育、さらには大学院まで含めた専門教育や教員養成課程の改善、それに「高度教養教育」（学部3回生以上・大学院生向け）も含めた総合的取り組みを順次展開しています。

こうしたさまざまな歴史教育改善の活動を展開する目的として、次の2点を想定しています。つまり、①高校で歴史を十分学べなかった学生も含め、

国際人として活躍するのに必要な基本的知識・理解を提供することであり、また、②高校で「受験用の世界史（日本史）Bの丸暗記」でない歴史教育ができる教員を養成すること、また、大学で適切な入試の出題や教養教育・教員養成教育、「タコツボ型」でない専門教育ができるような「研究者」を養成することです。特に、歴史学と他の科目の橋渡しができる教員、歴史学と他の学問分野や学界外との関係が組織できる研究者など、いわゆるhistory communicatorを養成したいという思いがあります。

次に、それぞれの目的達成のために実施している具体的な活動を紹介します。①に対応して、教養課程で「市民のための世界史」（2007年度から試行。高校での世界史知識を前提にせず、世界史の粗筋だけ講義する）を、現在は6クラス開講しており、新入生の1割程度が受講しています。また、CSCD（高度教養教育）科目でも「市民のための世界史S」を開講しています。

②のために、(a) 刷新された史学概論に当たる「歴史研究の理論と方法」を開設しました。ここでは、歴史学の主対象と方法の変化、史料論、時間と時代、地域と世界、国家と政治、経済と暮らし等、テーマ別の講義を中心に言い、日本史・東洋史・西洋史各専修の学部2回生を必修としています。また、「歴史学のフロンティア」という科目では、グローバルヒストリーと「地域」の関わりを中心に教員各自の方法を提示するオムニバス講義を行っています。また、(b) プレゼンテーション・他流試合の訓練をするために、「世界史演習／歴史教育論I演習」という科目で、歴史教育研究会への参加を大学院演習として扱い、大学院生には「自分の研究の発表」ではなく決められたテーマの概論をグループ発表させるといった授業を展開しています。

そして、研究者や高校教員を志望する学生には、史学概論系とプレゼンテーション系に加え、「市民のための世界史」も含めた3系統の科目をすべて履修するよう奨励しています。特に、歴史系の授業を多数履修する余裕がない、地理歴史科の教員免許を目指す文学部以外の学生には、特殊講義で断片的な知識を学ぶよりも、これらの科目に集中して、概要を把握することを優先するよう指導しています。「市民のための世界史」を学ばせるのは、細かすぎ、かつ多すぎる専門知識を整理するのに有用だからです。

こうした取り組みは、次のような人文系教育の変革をより大きな目標とし

て設定しています。まず、ゼミと特殊講義だけで、ひたすら「狭く、深く」だけを追求する「専門教育」(総合大学では教員養成にも流用されていますが)からの脱却を目指すということです。そして、各専門分野の授業も、「各自が自主的に好きなことを学ぶ人文系」から、目標と方法をはっきりさせた、「はみ出し」や「やり直し」を可能にするきめ細かい個別指導をとまなう学年ごとの積み上げ型のカリキュラムへと転換をはかるということです。

学生の将来

これらの取り組みは、世界的視野をもつ人材の育成にも着実につながっています。「国内チャンピオン」に甘んぜず、世界で活躍できる研究者・大学教員を輩出するのみならず、外交官、国際交流専門家、中学・高校の歴史教員、図書館職員、新聞記者、出版社員、ビジネスマンといった、高度な専門性と広い視野を兼ね備えたその他の社会人も世に送り出しています。こうした実績は、国際系・外国語系学部の専売特許と見なされがちなグローバル人材の養成において、人文系専門分野による教養教育が持つ可能性も示しています。

専門教育分野の人材育成については、日本学術振興会特別研究員の採用率の高さが、上記の取り組みの有効性を証明しています。たとえば、今年度の東洋史専門分野では、博士後期課程の大学院生7人中5人が上記特別研究員に採用され、他大学で博士号を取得したポスドク3名がこれに加わっています。全国・全分野平均は20%程度ですから、その有効性が実証されているといえます。大学教員だけでなく、多くの修士号取得者を含む学生の一流企業や高校・中学教員への就職でも申し分ない実績をあげています。

2. 「市民のための世界史」

大阪大学では、2007年より私たちが中心となって大学教養教育における「市民のための世界史」開講という新しい試みをはじめました。その活動は大手新聞にも取り上げられるところとなりました。

本講座が主な対象とするのは、高校世界史を履修しなかった学生、または、履修したが暗記に終始して「生きた知識」になっていないままの学生です。

この講座の特徴は、受講生に求められる歴史に関する予備知識は中学生程度でかまいませんが、一般的な用語や論理は大学レベルを要求するところです。本講座が目標とするのは、大学・大学院の卒業・修了後に国家主権の担い手(かつ/または)国際人として生きるのに、最低限必要な世界史の知識・考え方を習得させることです。なお、ここでいう「市民のための」は「将来の市民のための」の意味で使っています。

次にその授業形態なのですが、教科書は高校世界史B教科書を指定し、これを事前に読んでくることを前提に、プリントを使って講義を行います。ほぼ毎回、論述式の小テストを行い、期末試験は、「持ち込み可」にしておいて単純な穴埋めを含む出題をする場合もあります。

ただ、高校教科書はやはり不便なところもあります。やはり独自の教養世界史教科書が必要になりますが、その教科書作成を平成23～25年度科研プロジェクトの主目標としており、現在作業を行っているところです。多くの大学の教養テキストにみられるような、大勢の専門家に自分の専門の分野を自由に書かせるという方式は問題が多く、そのため、この教科書作成にあたっては、少人数で執筆して、できるだけ多くの専門家からコメントをもらう、というやり方を探っています。

本講座は、複数の教員が担当します。当初、私はアジア通史を講義していましたが、2011年度からは世界史全体を教えるように努めています。他の4クラスは中央ユーラシア古代史中心の世界史が2コマ、ヨーロッパ古代中世史が1コマ、近世以降の経済史中心のグローバルヒストリーが1コマとなっています。

私の講義の組み立て

現在作成中の教養世界史教科書構成の基本デザインは、私の世界史講義の組み立てを踏襲しているため、ここで、その思想と目標を概括的に紹介します。

私の世界史講義の特徴は、世界史の大きな構図に絞って提示する点にあります。そのため、さまざまな国の個別史などは「必要になったら自分で調べてくれ」と割り切っています。その代わりに、地域世界ごとの比較を多用、また、近現代史は「中心」や「覇権国家」の話だけに終始しないよう心がけて

います。各時代の記述配分は、近世まで（～18世紀）と近現代（19世紀～）の割合をほぼ半々としています。作成中の教養世界史教科書も、私の持論にもとづいて、このような配分となりました。

私の講義が目標とするのは、第一に、アジア、特に広義の東アジアを正當に位置づけ、日本史を完全に組み込んだ世界史を理解させることです。もちろん、近世以降の「ヨーロッパの奇跡」を正當に評価はしますが、「古代ギリシャや中世西欧が人類史の普遍である」とか、「欧米中心の世界が今後も永遠に続く」などとは教えません。第二に、現代世界の諸問題や環境、ジェンダーなどの新しい問題領域を当然のものとして扱う世界史像の把握です。文化史、とくに芸術史や文学史は手薄ですが、宗教の社会的役割や、近代の文化や科学・学術の意味についてはしっかり解説するよう心がけました。また、受講生の所属専攻の多様さを考慮し、理工系・医歯薬系、社会科学系・外国語学部などそれぞれに向けたネタの準備も怠らないようにしています。第三に、固有名詞（とくに人名や地名）を「必須事項」としない世界史の教育です。固有名詞を厳選したスリム化が基本路線ですが、この場合、本論に関わる固有名詞と、ネタ・エピソードとして触れる固有名詞とは区別しています。相当数の固有名詞を削ぎ落とす一方で、大学教育に必要な「術語」「概念」はかかなりていねいに説明しています。第四に、多様な立場と選択肢のなかで、矛盾にとらわれながらも歴史を選択する感覚が伝わる世界史を教えることです。

3. グローバルな歴史と地域の個性的歴史をどうつなげるか？

国際系・外国語系学部における歴史教育の役割

教養として歴史を学ぶことには、次のような意義があります。まず、日本を知らない「国際派」、また、ディシプリンなき「外国語と海外事情通」などからの脱却に役立つ教養のひとつであるという意義です。どちらも国際系・外国語系学部の学生・卒業生がはまりやすい陥穽です。その上でさらに、グローバルな視野と地域の視点を両立させるのが望ましいでしょう。

そして、さまざまな国際紛争・対立を含め、「なぜ現代世界がこうなっているのか」がわかる歴史を中心にしつつ、異文化理解や多文化社会づくりと

いう一般的課題にとどまらないことです。専門性をもつ通訳・翻訳者も含めた、観光や考古学・文化財保護等における国際協力など人文学的国際交流の具体的なテーマにも目を向けた歴史を学ぶことが求められます。

具体的な例をあげましょう。ユネスコ世界文化遺産に指定されている、2010年秋に建都1000年祭を行ったベトナム・ハノイのタンロン皇城遺跡の調査・保存・修復に、日越両政府間の合意にもとづいて建築・考古・保存科学などで日本チームが大きく貢献しています。ところが、1000年前のベトナム王朝の歴史そのものが十分解明されていないうえ、日越の認識ややり方の違いの橋渡しをできる人材が不足しており、全体的な保存・修復の方針の策定が難航しています。これは、日越間で、そもそも歴史や文化の通訳・翻訳者が全然足りない状況が根底にあるためです。そういう状況下で院生時代から20年間、ほとんどベトナムに住み着いて調査・人材養成や学術通訳に精力を傾けた考古学・古代学者西村昌也氏に、この9月、ポストク研究者としては異例の「友好勲章」がベトナム政府から授与されました。西村氏は惜しくもこの6月に事故死しましたが、ベトナム政府の勲章追贈は、そうした人材がいかに希少であるかを示すものです。こうした歴史学的教養と専門性をあわせ持った人材育成が急務な分野は、まだまだ数多く存在しているのです。

入り口と出口で必要なこと

大学の教養歴史教育には、教える中身と同じくらい重要なことがほかにあります。それは入り口と出口に関するものです。入り口で必要なこととは、歴史を学ぶ意味・効用、基本的な概念・用語などの提示・説明です。出口で必要なこととは、歴史学とは何をどうする学問で、対象や方法がどう変わってきて現在はどうなっているかという、いわば超簡単史学概論です。専門に勉強したかったら、どこへ行ったら、あるいは何を读んだらいいか、歴史の専門家はどこにどのように存在するのかななどを、必要な学生が調べられるようにしておくことです。

加えて「歴史はロマンの対象」、「歴史はしょせん政治的な物語だ」といった卑俗な理解に対する、「歴史学も科学だ」などというお題目だけにとどまらない説明が不可欠です。

21世紀の世界で歴史を学ぶ意味

大学の教養歴史教育の入り口として、何のために歴史を学ぶのかをきちんと提示する必要があります。私が作成した「市民のための世界史」講義プリントより、入り口に当たる説明の部分を抜粋して箇条書きにしておきます。

1.1. 歴史は動かない過去の事実を暗記する、「役に立たない」科目か

* 無数の過去のできごとのなかから意味のあるものを取り出すための
「つなぐ力」「くらべる力」

1.1.1. 歴史そのものの知識・理解はどう役立つか

- ・ 現代社会がなぜ、どういうプロセスでこうなっているのかを理解する（→近い過去ほど重要）。
- ・ 過去の人々の考えや行動を、われわれの行動や選択の参考にする（→どの時代でも材料はある）
- ・ 良質な娯楽の材料（事実は小説よりも奇なり）

1.1.2. 歴史を学ぶことを通じて何が身につくか

- ・ 時間の流れや時代を見る目（現在だけに一喜一憂するのではない長い目）
- ・ 特定の角度だけでなく、政治・経済・文化などから多角的・総合的に世の中をとらえる能力
- ・ いろいろな記録の真実性を見分ける情報リテラシーと、違った時代（や外国）の人間の思考や行動の様式を解き明かす異文化理解能力

1.2. 世界史は日本に関係ないか

- ・ 世界史のなかで考えることにより、日本史をガラパゴス化から救い出す。
- ・ 日本史を含めることで世界史・アジア史の視点を転換しレベルアップする。

東南アジア・海域アジアやアフリカから何を学ぶのか？

グローバルな視野と地域の視野をあわせ持つ世界史では、ヨーロッパや中国といった「中心」を担った地域だけではなく、東南アジア、海域アジア、アフリカにも十分な目配りがなされるべきです。こんにちでも根強い、これ

らの地域に対する「弱い、遅れた、かわいそうな地域」という眼差し、そして、「それをわれわれが助けてやる」といった上から目線、または「日本に生まれてよかった」という感想を強化するような教え方に、私は疑問を覚えます。

アジアの「メジャー地域・国家」を学ぶ

逆にアジアの「メジャー地域・国家」の歴史を学ぶ際に陥りやすいのが、「ヨーロッパ中心史観の裏返しとしての自地域中心史観」の危険性です。また、中心性や構造的把握を拒否する国民国家批判やポストコロニアル研究などもつ、「永遠の批判者」という態度の限界も明らかです。アジアでは日中韓（朝）だけ、世界では欧米先進国しか見ない思考様式からの脱却をどう果たすかが、日中韓（朝・越）に共通の試金石といえるでしょう。

試みるべきいくつかのモデル

以上を踏まえつつ、教養としての世界史がとるべき形にはどのようなものがありうるのでしょうか。世界史教育はグローバルな構図を示すことに限定するべきでしょうか。それとも、高校世界史Aの内容のようにメガ・リージョンごとの特色は提示しておくべきでしょうか。さらに国やローカルな地域の例示を含めるかどうか、これは高校地理のなかでの地誌の扱いとも共通した問題です。

今後、高校教育に導入予定の世界史・日本史を統合した「歴史基礎」の動向も見ながら、グローバルーリージョナルーナショナルーローカル4層構造と「脱領域」型ネットワークを含んだグローバルヒストリーを構築することが理想と考えます。そこでは、地域研究系との不断の切り結びが必要となっていくでしょう。

以上、まとまらない話ですが、ご静聴ありがとうございました。



◆「教養としての歴史学」の構築へ

小川原 宏 幸

はじめに

歴史学は何の役に立つのか。マルク・ブロックの有名な一節を引くまでもなく、古来、多くの人々にさまざまな場面で取り上げられてきた課題です。しかし多くの歴史研究者は、この問いを案外掘り下げてこなかったように思います。むしろ、こうした問いに正面から向き合ってきたのは歴史教育の現場に立つ人々でした。本日ご講演いただいた桃木至朗氏は、自身の専門研究の領域を持ちながらも、歴史教育に携わる中高の教員との対話を通じてこれからの歴史学のあり方を構想しようと意欲的に取り組んでいます。ここでは桃木報告と関連しながら、「教養としての歴史学」に関する構想を提示することでコメントに代えます。

歴史学は何の役に立つのか

まず、歴史学は何に役立つのかという冒頭の問いに対する私の考えを示しておきます。私は、歴史学の本質的な問いは厳然たる他者との対話にあり、それは自己認識と相即関係にあると考えています。歴史学とは、意識的、無意識的に自らを規定している諸事実の積み重なりと、史料等を通じて対話していく知的営みです。そして、いわゆる外国史がその典型ですが、歴史学は時間的・空間的異文化との複合的な知的コミュニケーションであり、そのような場として歴史学が開かれることによって自己相対化の契機として機能していくはずです。つまり、歴史学は、その作業を通じて出会う他者との関係性のなかで自らが何者なのかを認識していくことを目的としているのです。

歴史学でも存在被拘束性ということばがよく使われますが、私たちは自分が生きている時代を超越して対象を認識できないことを前提にした上で、歴史学の知的営みを通じて、自分の生きている時代を少しでも相対化することが重要です。その際、歴史学の方法自体もまた存在被拘束性に規定されていることにも留意しなければなりません。私たちがなぜ歴史的考察を行うとき

の領域的発想として国家を中心概念に発想してしまうのかという問いを立てるとき、いわゆる国民国家形成期に構想された近代歴史学もまたモダニズムのドグマにとらわれていることは容易に理解できるでしょう。そうした国民国家の母斑を押された歴史像を相対化するために、歴史的経験の解明を積み重ねていく作業のなかから近代批判の視座を鍛えていくことが、これからの歴史学に必要なとされています。いまなお、国民国家をはじめとするさまざまな近代的装置が歴史像を「独占」している現状を拒否するために歴史学は重要な「方法」であり続けなければなりませんし、そのような歴史学を鍛え上げていかなければなりません。

これからの歴史学の役割

現在私は、「グローバル」と「地域文化」をキーワードとしながら社会科学的な素養を学生が身につけることをコンセプトとして構想されたグローバル地域文化学部の教員として学生を教育する立場にあります。私自身はいわゆる歴史学のプリンシプルによって自己形成してきましたが、本学部には、必ずしも歴史学を学びたいと思って入学してきた者ばかりいるわけではないでしょう。そうした学生に対して私が歴史学的なスキルを振りかざすのならば、私と学生との間には必ずやミスマッチが生じます。これはお互いにとって不幸な結果しかもたらしません。

こうしたミスマッチを解消する取り掛かりとして「教養としての歴史学」の構築を提唱したいと思います。個々の事実をひたすら検証していくという歴史学的なスキルをいったん離れ、歴史学的なモノの見方が現代社会を生きていくことにどのように役立つのかといった入口の議論から、人間にとって歴史学とはどのようなものであり、どのようにあるべきかという哲学的な問いに至るまで、教養としての歴史学はどうあるべきかということを私たち教員が学生とともに自身の問題として構想していくことが必要となるでしょう。

そして、こうした「教養としての歴史学」の構築は、本学部学生に対する教育という当面の問題を解決することだけでなく、たとえば暗記科目であるとか、過去の事実は現在生きているわれわれには関係ないといった、圧倒的

多数の人々がもっている「歴史学」に対するイメージを一変させることにつながります。本来、歴史学にとって重要なのは、個々の事実の検証そのものではなく、歴史学的なモノの見方、つまり歴史学というフィルターを通すと世の中はどのように見えるのかという視座を獲得することにあるはずです。現在、「歴史マニア」が蔓延する一方で、歴史学的なモノの見方は忌避されるという一見パラドキシカルな状況がありますが、これは実は、「歴史学を理解できない／しない」がゆえに生じている表裏一体の現象です。歴史研究者の多くから「歴史離れ」を嘆く声が聞かれますが、そうした現象が生じている責任の多くは、歴史学を社会のなかでの有用性という観点から考えてこなかった私たち歴史研究者こそが負わねばなりません。歴史学も実学なのだと確信犯的に主張するつもりはありませんが、歴史学的な発想が、社会を見るときにこんなふうにも応用できるといったヒントみたいなものを学生、ひいては一般社会に提示できるようにしたいと思っています。「教養としての歴史学」の具体像については、これから検討していかなければなりません。その試みは「歴史離れ」を少しでも食い止めることにつながるのではないかと、というひそかな期待も抱いています。

以上、簡単ですが、桃木報告に対するコメントといたします。



◆桃木講演に対する反応とその分析

向 正 樹

はじめに

グローバル地域文化学会第1回学術講演会「世界史教育と地域史教育」における桃木至朗氏（大阪大学大学院文学研究科教授）の講演は、「この挑発と甘い話に乗る同志を求む！ Quý vị và các bạn hãy tin vào chuyện vừa cay vừa ngọt này, tiến lên!」というメッセージで締めくくられた。

「歴史と他の科目の橋渡しができる教員、歴史学と他の学問分野や学界外との関係が組織できる研究者など、history communicatorを育成したい」という桃木氏の大阪大学における取り組みと、必ずしも歴史学を専門としない講演会参加者が目指すものとの間には、当然違いもあるだろう。しかしながら、「グローバル人材育成を国際系・外国語系学部の専売特許にしない」という桃木氏の取り組みは、ひろくグローバル時代の人材育成にも通じるものである。桃木氏との対話を通じて、参加した教員・学生らひとりひとりが自身の教育や学びのありようを振り返り、また、自らの進むべき道を問い直すよい機会となった。

講演会には、同志社大学教員（19名）、同志社大学学生・聴講生（7名）から高校教員（3名）、高校生（2名）、一般人（4名）からなる35名が参加した。大学教員と大学生は、大多数がグローバル地域文化学部所属であった。講演終了後、桃木氏と参加者との間で活発な議論が交わされた。本講演では、フィードバックシートを入場時に配布、講演会終了後に回収した。十分な記入時間を取ることができなかったが、それでも回収枚数は22枚を数えた。今後の参考のために、ここでその集計結果を提示したい。

質問・回答およびその分析

質問項目は、桃木氏の講演資料（パワーポイント）の章立てに沿って、Q1（-a、-bの2項目あり）は「1. 阪大史学の挑戦」について、Q2は「2. 市民のための世界史」について、Q3は「3. グローバルな歴史と地域の個性的歴史をどうつなげるか？」について、参加者の意見を問うものとした。

Q2. 「2. 市民のための世界史」

「卒業・修了後に国家主権の担い手（かつ／または）国際人として生きるのに、最低限必要な世界史の知識・考え方の習得」についてどう思いますか？

回答：

	反対 ←	→ 賛成				無回答
Q2	0	1	1	3	17	0

分析：

こちらは圧倒的に“strongly agree”の占める割合が多い。桃木氏の、将来の市民として必須の教養としての世界史という構想への強い賛意を反映するものとみられる。“strongly disagree”（強く反対）を選んだシートは0であったが、“disagree”（反対）や中間（どちらでもない）にあたる回答も2つあった。

今回の講演会の主題は「世界史教育と地域史教育」であったため、世界史や歴史を学ぶ意義について比較的理解が高い参加者が集まったと考えられる。世間一般には、市民として必須な教養としては歴史以外にありうるのではないかと考えたから“disagree”（反対）にあたる回答がもっと前面に出る可能性もあろう。桃木氏の言う歴史教育の「入り口」の果たす役割の重要性は無視できない。

Q3. 「3. グローバルな歴史と地域の個性的歴史をどうつなげるか？」

「日本を知らない『国際派』、ディシプリンなき『外国語と海外事情通』などから脱却するのに役立つ教養」「グローバルな視野と地域の視点を両立させるのが望ましい」といいますが、その具体的な方策として、どのようなものが考えられるでしょう？

回答：

- ①地域のことを考える。
- ②「つながり」を学ぶことに尽きると思います。時を超えた、空間を超えた地域（人々）と地域（人々）とのつながりを学ぶこと。ただし、それだけに没頭、埋没してしまうのではなく、その他の可能性をいつでも考えることが大切だと思います。（高校教員）

- ③そもそも、「ディシプリンなき」とは何を言っているのかわかりません。具体的な方策としては、それに相応しい人物が「グローバルと地域の密接な関係を具体的に講義すること」でしょう。
- ④「グローバルな視野」を言うのであれば、ジェンダーの視点も導入した世界史・地域史を考える必要があると思います。高校の世界史教科書をいくつか見ても、女性の話が加わっている程度で、歴史の枠組を再考するには程遠い内容です。近現代史を講義する上でヒントがあればお願いします。(大学教員)
- ⑤海外への研修旅行(高校) ex.ベトナム、マレーシアなど
- ⑥自分が授業でやっていることとしては、北米の歴史的勢力地図の変遷を、英仏-植民地人-先住民の利害関係から説明してみました。また、日本人の国際移動から、学生の抱く「日本観」を破壊・再構築するとともに、北米のエスニック・スタディーズの前提にも挑戦しています。質問ですが、講義15回で学生に何か書かせようとするので全く時間が足りないのですが、桃木先生はどうしておられるのでしょうか？(大学教員)
- ⑦私の高校の英語の教師はみな桃木先生の言う「第二段階」の人が多かった。まずはそのあたりの問題意識を教員が身につけることが必要かなと思った。
- ⑧体系的・構造的な把握のしかたの訓練+具体的な場・時に生きるひとりひとりの物語に耳を傾け、受け止めることのできる感受性を育てる+文字資料を残さない文化の「歴史」を理解しようとする訓練(どうしたらよいかも含めて)(大学教員)
- ⑨海外で専門教育を受ける。日本についてアジアについて説明を求められるので、詳しい専門的な説明をするために、日本やアジアについて本腰を入れ勉強することもあるから。(大学教員)

補足：

講演後の討論では、フィードバックシートのQ3への回答と重複するトピックについての受け答えが多数あった。無論、それ以外の質疑も活発になされたが、紙幅の都合上、逐一再現することは差し控える。ここではシートに記

載された意見・質問およびそれに対する桃木氏の返答を踏まえた補足説明を付すにとどめたい。

- ③「ディシプリンなき『外国語と海外事情通』などから脱却」について、桃木氏の補足説明は概ね次のようなものであった。一流の外国語エキスパートや海外事情通を目指すうえで、対象とする国や地域の忠実な代弁者になる段階がある。相手の国や地域を好きになるということは、その言語や文化について深く知るために避けては通れない道ではあるが、アカデミックな批判的な眼を養わなければ、相手を深く理解しつつ自他を説明し交渉できる、より高い次元に達することができない。桃木氏は著書『わかる歴史 面白い歴史 役に立つ歴史』（大阪大学出版会、2009、196頁）において、異文化理解の三つの段階を次のように整理している。

C級：自国や先進国の常識だけでしか考えず、相手の内面を理解しようとはしない(社会科学やビジネス・ODAの世界ではまだ根強い)
 B級：相手の立場に立とうとするあまり相手の忠実な代弁者になる(外国語系や人文系に多い)
 A級：相手を尊重しつつ複眼的に考え交流・交渉できる

- ④「ジェンダーの視点も導入した世界史・地域史」に関して、桃木氏の「市民のための世界史」構想では、枠組み自体をジェンダーの視点でつくりかえるよりは、記述の中でジェンダーの視点を取り入れる方向で考えているとの返答であった。討論のなかでは触れられなかったが、桃木氏の教養世界史教科書作成のための準備作業で、既存の高校世界史教科書におけるジェンダー・トピックの抜粋とその分析、院生によるジェンダー史の発表など取り組みを行っている。最近の院生をみていると、男子学生のジェンダーへの関心が比較的高い傾向がある、という紹介もあった。
- ⑥の質問に対する桃木氏の返答は、やはり時間はタイトであり、考えるヒントになるような内容を授業の中で示したり、または授業後の休み時間を利用して書かせたりするなど工夫するとのことであった。私個人は、学生が授業時間外にオンラインでミニテストを解いたり、論述問題に答えたりできるEラーニングの活用が有効とおもうが、私の経験では、学生全員にオ

ンライン学習を徹底するのは非常に困難であり、頭の痛い問題である。

- ⑦桃木氏のいう「第二段階」については、先の回答③への補足説明で触れた異文化理解の三つの段階のB級にあたる。

おわりに

以上、桃木至朗氏の講演に対するフロアからの反応とそれについての若干の考察を行った。今回の講演と、それに対する参加者のさまざまな意見に触れることで、「アジア太平洋地域文化の形成 I」という世界史に相当する講義を担当する私自身が深く再考させられ、今後、授業内容をさらに改善していく多くのヒントが得られた。

私自身が今後、どのようにグローバル時代の市民の教養となる世界史の講義を組み立てていくべきか、また、本学会メンバーが協力してグローバルな視野と地域の視野をあわせもつグローバル地域文化学なるものをどのように構築していくか、これらについては別の機会に論じることができればと考えている。

